

小田原用水をめぐるまちづくりの可能性

指導教員 加藤仁美助教授 60CA1238 阿久津 岳生
7JCA2220 鈴木 新吾
7JCA3206 大谷 浩一

1：研究の背景と目的

小田原市には豊かな自然環境や歴史的、文化的な蓄積に恵まれ城下町・宿場町として発展してきた歴史を持つことから市民の生活と「水」との関わりは大変深いといえる。

本研究では、小田原にとっての「水」に着目しその歴史、特に日本最古の上水道といわれている小田原用水の起源や経緯をたどり、これらを小田原という都市にどのように組み込んでいくかを考え、今後のまちづくりの検討材料とすることを目的とする。

小田原にとっての水

- 戦国時代、小田原城は巨大な堀に囲まれ、当時、最強の城といわれた。その堀には大量の水が必要であり、小田原用水から水を引いていた。
- 小田原の特産物の梅は、水はけの良い土地と豊富な水が必要である。江戸時代に東海道を旅する旅人には、梅干しが必需品であった。
- 小田原名産品の蒲鉾や干物などの原料は、小田原近海でとれる新鮮な魚である。その豊かな海水は現在でも小田原の商業を支えている。
- 東京、横浜などの大都市の火災を消火するには大量の水が必要である。その水は小田原の酒匂川から水を送っている。
- 小田原にはホテルやメダカのような自然の生物が数多く見ることが出来る。
- 小田原の水にこだわり、和菓子を作り続けているお店がある

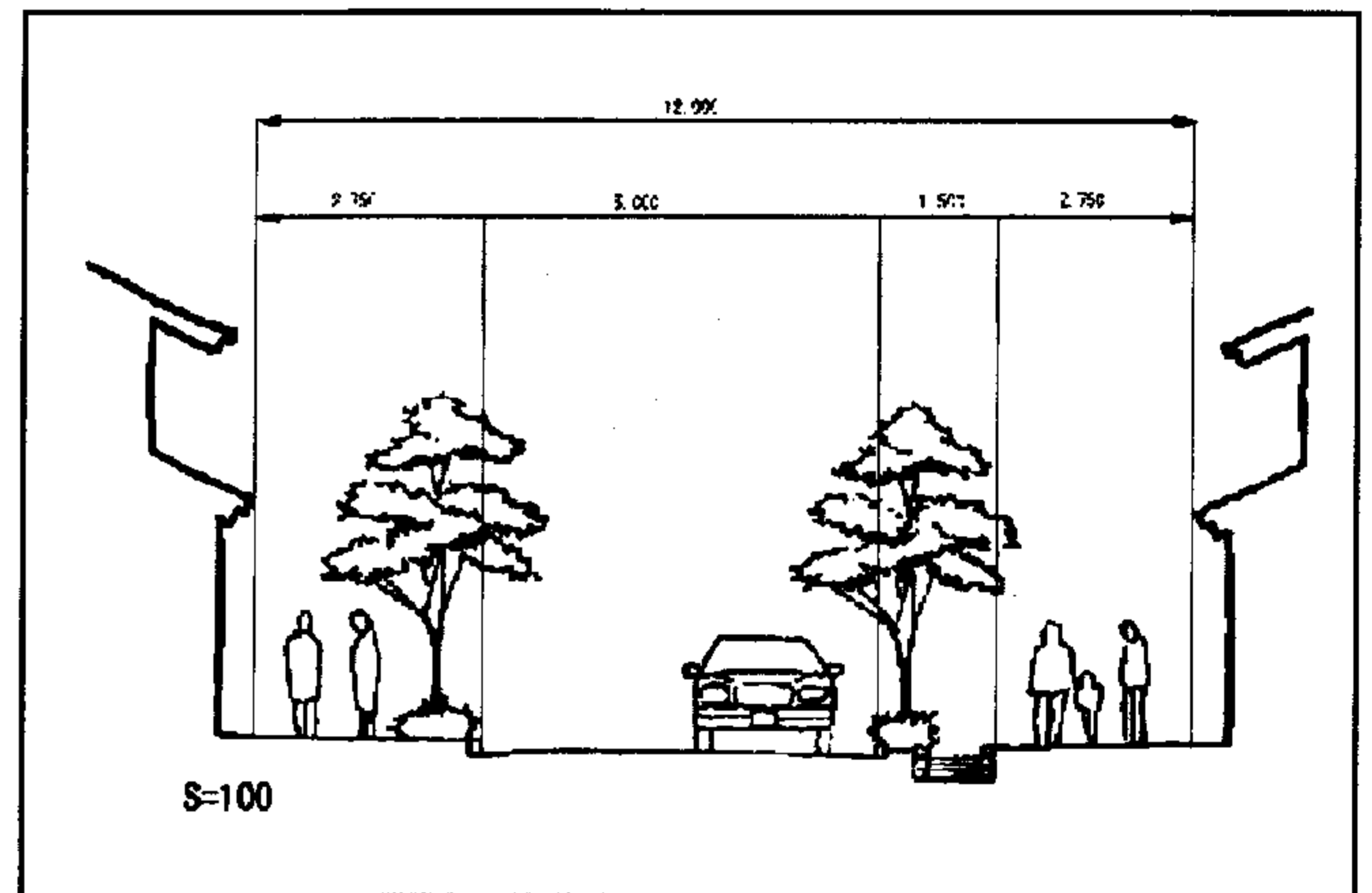
2：研究の方法

- 小田原全体の歴史を「水」を中心に文献などから明らかにする。
- 小田原用水を含む「水」と地域住民とのつながりを現地にいき現状を把握する。
- 小田原用水の復元計画に関わる行政資料の収集整理する。
- 小田原用水の歴史や計画に対する地元住民の意見等をヒアリング調査等により把握する。
- 今後の小田原のまちづくりにおける「水」の活用の可能性を考える。

3：行政による小田原用水復元計画

城下町として個性を今日によみがえらせ、商店街や地域の活性化を図るために、小田原市では旧東海道沿道の宮ノ前高梨町に新たにせせらぎを整備する計画をもっている。

行政のこのような計画に対し、住民からは歩道を広げると共に用水を通すため車道が狭くなり一方通行になる。またこの地域には駅から遠く、車利用者中心の商店が多いため、店への出入りが困難になり営業の妨げになるのではないかとなどの反対もあるようだ。



4：小田原の地形と用水の関係

小田原城は、箱根の山から連なる丘陵の先端部にある。「小田原城の地形」は傾斜度と尾根の表現を主とした構成としたが、図からは15%以上の勾配の急斜面が極めて多い複雑な丘陵地の中に、これらの斜面を巧みに使った空濠と土塁が配置されている。

小田原城の周辺の流域は海に近く小流域であり、水は必ずしも豊富ではなかった。そのため小田原用水が早川から水を引き、堀の水の補給をしていたものであろう。城下の水利としても重要であったと考えられる。小田原用水は海岸砂丘の尾根に配置され、城下一帯に水を供給する合理的な位置に置かれており、近世の工業技術を表現している。

ここで、小田原用水が実際どの様に存在していたかを調べると共に、その当時の街並を表現するために、地形図の上に小田原用水を描くと、海拔10mぐらいの「馬の背」の部分（現在の国道1号線）に小田原用水が沿うようにあったことがわかる。また、その地図上に、武家地、町人地、寺社地、を色分けして描くと、小田原用水がいかに当時の人々に使われていたかがわかる。

5：小田原用水の起源と仕組み

本研究を進める上で江戸東京博物館や小田原郷土資料館などの既存資料等から以下のことが検討された。

起源には2説あり大久保藩時代に建設されたという説と後北条時代に建設されたという説である。資料等により起源をたどることができないのは、やはり戦国時代の建築技術であったからであろう。

小田原用水は、当時の上水として大変貴重なものであった。その仕組みには当時の知恵がいたるところに見られる。「水は高い所から低いところに流れる」という当たり前のことを上手く利用して、用水の本線を引くにあたって出来るだけ地形上の尾根にあたる馬の背の部分に通したのである。そして、分水を馬の背から引くことによって多くの人々が小田原用水を利用できたのである。そして旧東海道の途中に埋樋（上水枡）というものを設置し、上水を一旦溜めることにより、水質検査やゴミを沈殿させる浄化システムとした、本線からの分水を木樋でつなぎ、木樋と木樋の接合に継手を使い、その後、上水枡を隔て上水井戸に至り、上水として活用されていたとされる。

6：まとめ 小田原のまちづくりの可能性

本研究では、小田原用水の起源および用水をめぐるまちの変遷を調べ、今後のまちづくりにいかす方法を探ろうと試みたが、小田原用水に関する資料はほとんど残っておらず、以上の史実しか明らかにすることができなかった。

しかし、これらの研究から、小田原用水を活かした今後のまちづくりの可能性を検討すると、以下のような提案ができるかと考えられる。

小田原市は小田原用水復元計画を進めているが、図1、からもわかるように、単に旧街道の車道と歩道にせせらぎを流すだけの計画がある。小田原用水はかつて地形上の馬の背（尾根）に通る旧街

道の中央を流れており、そこから各戸へ生活用水として配水するという仕組みにより、市民の生活に重要な役割を果たしていた。小田原用水の起源や歴史を無視した計画を行うのではなく、他のまちにはない、本来の小田原用水の姿を再現するようなせせらぎを復元する方向があるのではないか。

小田原にとっての「水」とはいったい何だろうか。市民の中には商工会議所青年部の人や報徳小学校の児童らのようにホタルやメダカを真剣に残そうと取り組んでいる人達がいる。これは小田原の「水」がきれいだからである。市民のこういう活動に対し行政側も協力をし、パートナーシップを組んで、この復元計画を進めていく必要があると考えられる。そうすればホタルやメダカなどの住めるせせらぎが実現できるのではないのだろうか。

市では昨年から市民の意見をまちづくりに活かす仕組みとして「政策総合研究所」を設立した。行政もこれらの市民の声を生かせるような場を最大限に活かして、市民参加によるまちづくりを考えていく必要があるといえる。

この研究で明らかとなつて史実を通し、一人でも多くの人に本来の小田原用水を知ってもらい、歴史のある小田原のまちづくりに関心をもってもらえればと願う。

7：参考文献

- ビジョン21おだわら—世界にきらめく「明日の1000年都市」—
発行 小田原市 編集 小田原市企画部企画政策課
編集・発行 小田原市環境部環境保全課
- おだわらの水—小田原市水道50年史—
- 守貞漫稿
喜田川守貞著、室松岩雄編、榎本書房 1927.6

